

2 伝統音楽・芸能のアウトリーチ・ワークショップ 実践のための論点整理

企画を立てる際にその芸術分野をよく知ることは言うまでもありませんが、特に伝統音楽・芸能の場合は「伝承」に目を向けることが大切です。ここでは伝統音楽・芸能が「伝承の中で演じられる」ことに注目し、伝統音楽・伝統芸能のアウトリーチ・ワークショップ（以下WSと記す）を考える際の論点整理をしていきます。

1 伝統音楽・芸能の伝承と「6W2H」

イベント企画の基本構成要素として「6W2H」があります。これは、Why（実施の動機や背景、達成目標）、What（事業の具体的内容）、Who（主催者、関係者、運営体制）、When（実施時期、曜日、時間帯）、Where（実施場所、会場施設）、Whom（客層、参加者、ターゲット）、How to（実施手法、手順）、How much（予算規模、財源）のことを指します。

それとは別に、伝統音楽等の場合には伝承の中で演じられる際の「6W2H」があります。一例として、Why（神様への奉納、悪霊を祇う）、What（音楽、音楽と舞踊、演劇）、Who（コミュニティの構成員、保存会等の特定の伝承組織）、When（随時、例祭、数日間）、Where（寺社、専用仮設舞台、民家、町中）、Whom（神様、先祖、コミュニティの構成員）、How to（道具や舞台等の準備、コミュニティ内で役割分担）、How much（祈禱料、祝儀）等です。伝統音楽や芸能の場合、奏演の場、身体表現との関係性、担い手等も多岐に亘るため、この「6W2H」は個々の音楽・芸能により異なります。さらに長年の伝承の中で、何らかのきっかけで宗教儀礼や地域の生活の場等から切り離され舞台化したり、舞台化されないまでも、実演の目的や実施時期、場所が様々な事情で変化していることも少なくありません。したがっ

て、一つの音楽・芸能の中でも時間軸で辿ると伝承をめぐる「6W2H」には変化が見られます。

2 伝承の6W2Hと アウトリーチ・ワークショップ

前項で触れたとおり、アウトリーチ・WSは「一方的」に提供される伝統的な公演形式や知識伝達のスタイルとは一線を画し、「参加」「体験」「相互作用」を特徴とし、その目的は社会課題解決への寄与や社会包摂、地域コミュニティの形成など拡大しています。一方、伝統音楽・芸能の伝承の現場では、例えば地域性の強い音楽や芸能の場合、演じる「場所」(Where)がステージ上に限らず神社の境内や民家の庭先であったり、主催者・運営者にあたる「人」(Who)が保存会等の特定の伝承組織で演者を兼ねていることも多く、さらには地域住民が自由に参加する盆踊りのように、演者と観客(Whom)の間に明確な線引きがない場合も少なくありません。目的(Why)も、多くが地域コミュニティの形成と密接に関係し「社会包摂機能」を有しています。

3 伝承の6W2Hを軸に企画を考える

このように伝統音楽等についてその伝承に注目し「6W2H」に当てはめると、アウトリーチ・WSを組み立てる上で参考となる具体的要点が見えてきます。またその伝承プロセスに注目すると、例えば「真似て学ぶ」ほか、楽器の旋律を擬声的に唱える方法（日本の口唱歌、韓国の口音）があります。これらは楽器を揃えなくても音楽を体験できるため、今日、学校の音楽の授業やWSなどでも取り入れられており、今後の展開の可能性を拡げるものとなるでしょう。（福田裕美）